

高齢者の心理

榎本 博明

(名城大学人間学部教授)

1. 老年期における性格の発達的变化

かつて発達心理学は、主として児童心理学と青年心理学から成り立っていた。つまり、人が生まれてから大人へと成長していくプロセスを探究するのが発達心理学であった。ところが、高齢社会化の進展とともに高齢者の心理を対象とする老年心理学が台頭し、さらには成人期にも発達上の多くの問題が生じることが指摘されるようになり、生涯を通じた心の発達を探究する生涯発達心理学が誕生することとなった。そうした流れの中で、性格についても、生涯を通してどのような発達的变化を示すかに関する研究が進められてきた。

(1) 老年期における性格の変化

老年期になると内向性が高まっていくというのは、しばしば指摘されることである (Botwinick, I. 1973; Field, D. and Millsap, R. E. 1991; Fozard, J. L. 1972; Neugarten, B. L. and Weinstein, K. K. 1964; Schaie, K.W. and Parham, I.D. 1976)。たとえば、シャイエとパーハム (1976) は、21歳から84歳を対象にした調査を行い、内向性には世代差があり、老年世代は他の世代よりも内向性が高いということを見出している。フィールドとミルサップ (1991) は、老年前期の人々と老年後期の人々の2群を対象に、14年を隔てた追跡調査を行った結果、両群とも外向性が低下していることが示された。このように、老年期になると内向性が高まる、あるいは外向性が低下するといった知見が多く示されている。ただし、コスタ

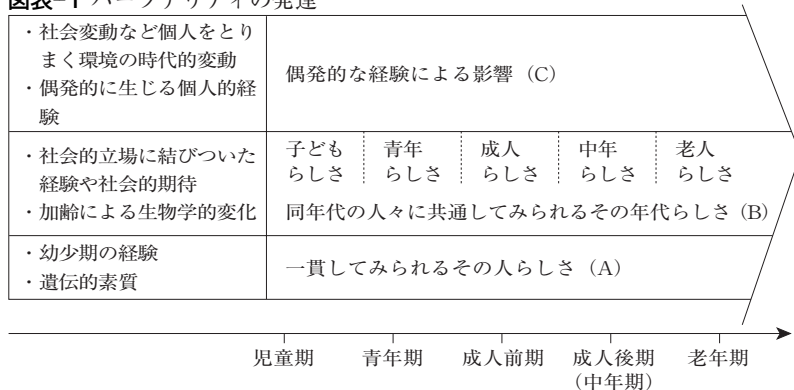
他 (1986) のように、内向性・外向性の次元は生涯を通して安定しているとする報告もみられる。

硬さや頑固さが強まるといった指摘もある (Botwinick 1973)。だが、頑固さは強まらないとの報告もあり (Angleitner, A. 1974; Schaie, K. W. et al 1973)、一貫しない。このことに関連して、トーマ (Thomae, H. 1980) は、アメリカの大学生は老人について頑固、短気、威張り散らす、不平不満ばかり言うなどとみなし、ドイツの小学校の教科書では老人は無能、依存的、受け身的であるように描かれており、精神医学者たちも老人を頑固、怒りっぽい、興奮しやすいなどとみなしているが、こうした老人の性格に対する固定観念や偏見は、かなり特殊なサンプルや事例から見出された特徴を過度に一般化しすぎたためであり、老人の典型像をあらわしていないと述べている (下仲 1995)。

下仲 (1997) は、頑固さなどの好ましくない特徴が老年期になって目立ってきた場合、それは知的能力や自己抑制力の低下や環境の変化のために適応が困難となり、元来本人がもっていた性格特徴が先鋭化したものであって、もともとよく適応し、柔軟で調和的な性格の持ち主は老人になってもそのような変化は示さないとしている。

加齢とともに養育的、親密的、寛容になるという指摘もある (Haan, N. 1985; Livson, F. B. 1981)。ユングの個性化の過程の概念をはじめ、人は人生の後半の自己実現のプロセスにおいてこれまで開発されていない面を開発することによって全面的に自己の可能性を開花していくという考え方があ

図表-1 パーソナリティの発達



る。しばしば指摘される加齢に伴う性役割の逆転現象、すなわち男性が女性化し女性が男性化していく傾向に関して、星 (2002) は逆転というより男女ともに両性具有的になると考えたほうがよいとしているが、そうした傾向も全面的に自己を開発していく自己実現傾向のあらわれとみなすこともできるであろう。

成人後期から老年期に至る30年にわたる縦断研究 (Leon, et al. 1979) によれば、MMPIのプロファイルを見るかぎり性格は30年間ほとんど変化せず、成人後期に病的でなく安定した性格を示した人は老年期になっても適応が良好であった。ただし、抑うつ性、心気性、ヒステリー性に関しては、加齢に伴って強まることが示された。

抑うつ性、心気性、ヒステリー性などの神経症傾向については、加齢によって強まるとの報告が他にもみられるが (Postema, L. J. and Schell, R. E. 1967など)、これは加齢に伴って体力が衰えたり、病気になりやすくなったり、退職や身近な人間の死などさまざまな喪失体験を経験しがちであったりという否定的な現実によりもたらされる当然の変化とみることもできる。

一方で、高齢者ほど不安傾向は低いとする報告もある。下仲 (1980) は、60歳以上の心身ともに健康な高齢者のC.A.S.不安検査の得点を対馬 (1963) の大学生のデータと比較している。その結果、総得点でみてもすべての下位因子尺度得点でみても、高齢者の方が不安が低く、情緒的に安定していることが見出された。さらには、高齢者の中でも、高齢群 (80代) の方が60代、70代群よ

りも不安得点が低いことが示された。ここから、高齢になるほど自分の行動を統制することにより不安を適切に処理しているのではないかとされた。不安傾向は一般に、その時々状況により変動する状態不安と、個人に特有な日頃の安定的な不安傾向である特性不

安に分けてとらえられるが、中里・下仲 (1989) は、25~92歳を対象とした調査により、状態不安も特性不安も加齢とともに低下することを確認している。このようなデータからは、不安傾向は年をとるにつれて低くなり、老年期は生涯の中で最も心理的に安定した時期だといえそうである。

以上のように、老年期における性格の変化に関しては、まだまだ解明されていない部分が多く、今後さらなる検討が必要なテーマといえそうである。

(2) 安定的な側面と変化する側面

性格が加齢によって変化するのか、それともあまり変化せず安定しているのかといった問題について議論する際には、ある程度の一貫性を想定することができる部分と変化していく部分に分けて考える必要がある (榎本 2004)。顔や体つきに関しても、その人らしさが生涯を通じてみられるとともに、他方では同年代の人々に広く共通してみられる幼児らしさや青年らしさ、老人らしさというものもある。同様のことが心理的性質にも当てはまるのではないかと。たとえば、70歳のある人物に関して、その人の10歳の児童期のときの性格と20歳の青年期のときの性格、50歳の中年期のときの性格や、70歳の老年期にある現在の性格との間に、何らかの共通点を見つけることは、多くの場合そう困難なことではないであろう。だが一方で、10歳のときには70歳のときの本人よりも10歳の時の友だちに似ているとみなし得るいわゆる児童らしさがあり、20歳のときには50歳のときの本人よ

図表-2 老年期への移行期の発達課題

- ・社会的役割を中心とした生き方から、社会的役割による縛りのない自由な生き方へと転換する
- ・身体の衰え、さまざまな能力の衰え、職業生活からの引退、社会的地位の低下、経済力の低下、時間的展望の縮小などの喪失を体験しつつ、新たな現実に適応したライフスタイルを確立する

者に譲るなど、社会的責任や社会的地位の喪失もしくは低下、それに伴う経済力の低下も経験する。こうした衰えや喪失が重なる現実

りも20歳のときの友だちに似ているとみなし得るいわゆる青年らしさがあるのもまた事実であろう。

すなわち、図表-1で言えば、年代を通じて一貫してみられるその人らしさ（図表-1のAの部分）に同年代の人々に共通してみられるその年代らしさ（図表-1のBの部分）が絡み合っ、そのときどきの個人の性格特徴の基本的な部分がつくられると考えるのが妥当であろう。前者は、遺伝的素質に基づくとされる気質と可塑性の高い幼少期の経験によってつくられる性格の基底部分を意味する。後者は、加齢による生物学的な変化に深く関わる性格の部分、およびそれぞれの年代の社会的立場に結びついた経験や社会的期待によってつくられる性格の社会性を帯びた部分を意味する。これらに偶発的な経験による影響（図表-1のCの部分）が加わって、そのときどきの個人の性格特徴が形成されると考えられる。

高齢者の性格ということ而言及されるのは、この図表-1でいうとBの部分、すなわちその年代の人々に広く共通してみられるその年代らしさである。それについて考えるためには、老年期の人々が置かれている状況を明らかにする必要がある。

では、老年期とはどのような時期であるのか。もっとも大きな特徴は、定年退職により社会的役割を中心とした生き方から解放され、子ども時代のようなまったく社会的役割による縛りのない自由な立場になるということである。そのような老年期の課題は、社会的役割から一步距離を置いた形で自分らしい生活を再編していくことである。老年期は、身体の衰えをはじめとするさまざまな能力の衰えを痛感したり、それによる行動の制約を受けたり、病気がちとなるなど、生物学的な老化を経験する。寿命も意識し、時間的展望が急速に縮小していく。定年退職などにより職業生活から引退したり、これまで果たしてきた役割を後継

に適応したライフスタイルを確立することが求められるのである（図表-2）。

このような状況に置かれて、自信を喪失し絶望感に浸るか、自由度の高さを肯定的にとらえてゆったりとした生活を楽しむ方向に向かうかは、それまでの人生を受容できているかどうか、そして心の支えとなるような人間関係を築いてきているかどうかにかかっている。そうした条件の如何によって、自信がなく、自分に価値を感じられず、焦燥感が強く、孤立感が強いといった方向への心理的变化が生じる場合もあれば、ゆったりとした落ち着きがあり、自己受容ができており、自他に寛容といった方向への心理的变化が生じる場合もあると考えられる。それではつぎに老年期の心理的变化に影響する要因について詳しくみていくことにする。

2. 老年期の心理に影響する諸要因

ハヴィガースト（1953=1955）は、人生の各発達段階ごとに達成すべき課題、すなわち発達課題を設定している。老年期の発達課題としては、体力や健康の低下に適応すること、引退や収入の減少に適応すること、配偶者の死に適応すること、同世代の人々との率直な友好関係を確立すること、社会的・公的の責務を果たすこと、満足のおよぐ物理的生活環境を確立することがあげられている。こうした発達課題は、生物学的基準、社会文化的基準、心理学的基準に基づいて設定されている。このような発達課題が設定される背景には、老年期にある者を取り巻く諸条件がある。そこで、そうした諸条件を身体・生理的要因と社会環境的要因の両面から検討していくことにする。それらの要因が老年期の心理的条件をもたらすものと考えられる。

(1) 身体・生理的要因

エリクソン他（1986=1990）は、老年期における身体・生理的变化、とくにその衰弱面について、つぎのように言及している。

「人間の身体は老化とともに全体の緊張度が弱くなり始め、体の中のあらゆる部分がうまく機能しなくなって、その箇所が気になり出すと、その老化した身体は改めて病弱感というものを持たざるを得なくなる。それは、ほとんど避け難い顔のしわと言ったあまり取るに足りない問題もあれば、苦しいもの、あるいは体を衰弱させるもの、恥かしい思いをさせるものもある。これらの病気の程度がどうであれ、その病気になった老年者は、やむなく、人生の面白い局面から、身体が求める厄介な要求へと注意を向けさせられる。これはフラストレーションとうつ状態をもたらすことがある」

エリクソンたちは、顔のしわのような変化を「あまり取るに足りない問題」としているが、そうした身体機能上の不便さには関係しない外見上のちょっとした変化であっても、本人の自己概念に大きな影響を及ぼすことも少なくない。自己概念は、本人の心理状態に大きな影響を及ぼす要因となる。さらには、外見面的変化であっても機能面的変化であっても、それらに対する反応の仕方は人それぞれである。その点に関しては、エリクソンたちも面接調査対象者の実際のことばを引用しながら言及している。

「報告者のひとは次のように述べている。『何かに熱中しているかぎり、自分のことを考えたり、くよくよしたりする時間なんかありません。今のわたしはいつも忙しくて、のんびり座っているなんてとんでもない……。』別の報告者は……むしろ諦め顔で言う。『もうどうでもいいって傾向はあるね……夜はここに座ってテレビでも見てよかって。それが一番楽しみだから。あんただって80歳を過ぎたら、わかるだろうよ。』老年者たちが自分たちの身体的能力を現実的に評価する時、彼らは妥当な依存に順応し、それを受け入れることができる。実際の老年者のひとは、次のように述べている。『もちろん、まだいろんなことに興味はあります。しかし、何でも、以前と同じ

ように何でもできる、と思っははいけません。手放さなければならないこともあるんです』

このように、老年期の身体・生理的变化はさまざまな心理的反応をもたらす。クロガー（2000=2005）は、老年期の身体・生理的变化として、骨組織の減少が骨粗しょう症を引き起こし骨折しやすくなること、小じわや深いしわ、皮膚のたるみ、皮膚の弾力の衰えといった肌の変化や髪が薄くなったり白髪になったりといった変化が外見上の著しい変貌をもたらすこと、視覚や聴覚といった感覚器官の感度の低下によって行動上の制約や社会的孤立感をもたらすこと、関節、筋肉、靭帯、腱の強度や柔軟性の衰えが運動能力を低下させたり行動の制約をもたらしたりすることなどをあげている。

諸々の身体外見や身体機能の衰えを自覚したり、実際に生活上の不便を経験したり、行動上の制約を受けたりすることによって、心理面に負の影響が生じがちであるのは当然の反応といえるであろう。また、身体機能や体力の衰えにより、さまざまな身体疾患に罹りやすくなるのも事実であり、高血圧、動脈硬化、糖尿病、癌といった深刻な病気への不安が高まるというのも一般的な心理的反応である。

加齢による生理的变化のひとつとして、認知能力の衰えも指摘されている。たとえば、長期記憶課題において、高齢になると情報再生能力の大きな衰えがみられることが報告されている（Plassman, et al. 1995）。刺激に対する反応時間が長くなるとの報告もある（星 2002）。認知能力を総合的にみるのが知能検査である。知能に関しても、従来は発達のピークは10代後半にあり、20代以降は衰退の一途をたどるとみられてきた。しかし今では、知能には成人期以降衰退していく側面だけでなく発達し続ける側面もあることがわかっている。ホーンとキャッテル（1966）は、知能を流動性知能と結晶性知能に分けている。流動性知能とは、単純な記憶力や計算力など作業のスピードや効率性が問われる課題の遂行に役立つ知能である。流動性知能は、青年期にピークがあり、その後衰退していくと考えられるが、これこそが一

般に知能検査で測定されているものといえる。結晶性知能とは、言語理解や経験的判断など作業の質が問われる課題の遂行に役立つ知能であり、これは成人はもとより老年期になっても発達し続けると考えられる。シャイエ (1980) は、知的能力の側面別の加齢による変化を検討している。それによれば、ことばの流暢性に関しては、ピークが25歳で、それ以降は60歳までは徐々に低下し、60歳以降は急激に低下することが示された。これに対して、ことばの意味に関しては、60歳まで上昇し続け、60代から80代にかけては徐々に低下していくことが示された。バルテスとストーディング (1993) やリンデンバーガーとバルテス (1997) も、高齢者は一般に考えられているより有能であることを証明するデータを得ている。バルテスたちは、エリクソンのいう老年期の英知と絡めて論じているが、高齢者の中には、読み書きのスキル、言語理解、人生上のさまざまな出来事を切り抜ける戦略などに関して、若い人たちよりはるかに熟達している人々がいるのは確かであろう (Kroger 2000=2005)。このように、知能のうち経験が役に立つ側面に関しては、加齢による反応速度や感覚器官の機能低下による悪影響を補って余りある経験の積み重ねの効果があるといえるであろう。

(2) 社会環境的要因

(a) 社会的役割の変化

高齢期に突入した多くの人々を襲う諸々の社会環境的要因の中で最も大きなインパクトをもつと考えられるのが、社会的役割の変化と次項で扱う喪失体験である。両者は重なり合うところがあり、ここで扱う社会的役割の変化もじつは喪失を伴うものといえる。

職業に就いていた多くの人々は、60代で定年退職を経験する。長年職業生活を生活の軸にしてきた者にとって、定年退職は大きな喪失体験である。定年退職は、没頭してきた仕事を失い、肩書を失うだけでなく、毎日のように通う場所を失い、給与収入を失うことも意味する。そうした喪失に打ち克てるかどうか問われるのが老年期で

あるとってよいであろう。趣味がなかったり、仕事以外にやりがいを感じるものがなかったり、仕事を抜きにしたネットワークが乏しいなど、私生活領域が疎かになっていた人たちにとっては、職業生活に代わる役割への転換が困難となりがちであり、定年退職は大きな危機ということになる。粗大ゴミ、産業廃棄物、濡れ落ち葉、熟年離婚などという言葉は、職場以外に居場所をつくってこなかった男性のためのものといえるが、そのような男性にとっては定年退職は致命的な危機ということもできる。没頭できる趣味があったり、退職したらこれをやりたいということがあったり、プライベートな人間関係がたくさんあったり、地域や家庭に根を下ろしていたりする人々は、職業役割に代わる新たな役割の構築が比較的スムーズに進むと考えられる。

子育てを中心に生きてきた人たちは、子どもの巣立ちによる役割喪失をすでに中年期に経験していることが多い。親役割の希薄化に伴って突きつけられるのが、夫婦関係の再構築である。老年期になると、さらに親役割が希薄化する。そこで問われるのは、中年期以降の夫婦関係の再構築がうまくいっているかどうかである。それと並行して、祖父母役割が求められるということも起こってくるが、祖父母役割をどのような形で引き受けるか、あるいはどのような形の祖父母役割が期待されるかも、老年期の心理に大きく影響するであろう。

(b) さまざまな喪失

老年期には、身体外見上の好ましくない変化、視聴覚機能や筋肉運動機能をはじめとする身体機能の低下、高血圧・動脈硬化・糖尿病・癌などによる健康上の障害など、さまざまな身体面の喪失を経験する。こうした身体面の喪失は、身体以外の領域、たとえば対人関係などの社会領域に影響を及ぼすことになる。身体外見上の好ましくない変化は自信の喪失を招き、対人関係面の積極さを低下させることも考えられる。筋肉運動機能をはじめとする身体機能の低下や健康の喪失は、行動範囲を狭め、人間関係のネットワークを縮小させ

ると考えられる。聴覚障害などの感覚機能の喪失も、人とのやりとりにおいて生じがちな煩わしさゆえに、対人関係の悪化や人間関係のネットワークの縮小をもたらす可能性がある。

長年にわたって年賀状のやりとりをしてきた友人・知人の死に直面する頻度が急速に増すのも老年期の特徴といえる。とくに親しくつきあってきた友人の死は、友人の喪失という意味において大きな衝撃であると同時に、自分自身の人生の有限性を突きつけられるという意味においても重たい意味をもつ喪失体験といえるであろう。

もっとも身近な人間関係面の喪失が配偶者の喪失である。配偶者との死別率を各年代ごとにみていくと、70代で急激に高まることがわかる。配偶者との死別率はとくに女性で高いが、年代別にみていくと、40代で1.8%、50代で6.0%と低いが、60代で18.5%とほぼ5人に1人の女性が経験しており、70代になると42.8%と半数弱の女性が経験している。男性の場合も、40代で0.5%、50代で1.6%、60代で4.5%、70代で10.5%と年齢の上昇とともに高まるが、全体的に女性よりも低く、とくに高齢になってから女性の比率との差の開きが目立っている。職場のつながりや子ども世代とのつながりが失われたり希薄化したりする高齢者にとって、残された最も身近であるはずの配偶者を失うことは、きわめて大きな衝撃となるであろう。

前項でみた社会的役割の変化も、言ってみればこれまでの社会的役割の喪失である。定年退職による職業的役割の喪失、それに伴う定収入の喪失や社会的地位の喪失、さらには職場の人間関係や通う場所の喪失、あるいは日々の生活目標の喪失がもたらす影響は甚大なものと考えられる。

3. 老年期における アイデンティティの問題

(1) 老年期におけるアイデンティティ

老年期には多くの喪失を経験し、ライフスタイルの大幅な変更も余儀なくされるが、そこでのアイデンティティの混乱をうまく乗り越えられるかは、それ以前のアイデンティティ形成がうまくいっ

ていたかどうかにかかっているようである。

エリクソン他(1986=1990)は、高齢者を対象とした大規模な面接調査を踏まえて、つぎのように述べている。

「老年期において、アイデンティティとアイデンティティの混乱との間の緊張を融和させようとする時、人は、思春期を支配していた心理社会的過程と再びかかわることになる。老年者がここで直面するのは、何十年と生きてきた自己、現在に生きている自己、そして不確かな未来に生き続けるであろう自己の意味を理解しようとすることによって、アイデンティティとアイデンティティの拡散の感覚の間でバランスをとろうという仕事である。老年者は、今まで信念に忠実に従って生き、わざわざ意識的に持とうとしないでもその人らしい特徴を持ちこたえて生きてきた人生を振り返るとき、時間的展望のきく地点から経験を再評価するというユニークな立場に立つ」

このようなアイデンティティをめぐる葛藤は人生の節目節目に生じることになる。ただし、青年期から成人期にかけてのアイデンティティをめぐる葛藤においては、アイデンティティの大きな変容が起こることも珍しくないが、人生の総決算の時期にあたる老年期のアイデンティティはそれ以前のアイデンティティとかなりの連続性をもつと考えられる。定年退職が老年期の人々にとって最も大きな喪失体験といってよいであろうが、定年退職後の人生への満足度や自尊感情を最もよく予測するのは、退職前の人生への満足度や自尊感情であることが示されている(Palmore 1981; Reitzes et al. 1996)。数々の喪失にもかかわらず、老年期の幸福感や自尊感情はそれまでの幸福感や自尊感情と連続性を保っているとの報告もある(Brandtstadter and Greve 1994; Ryff 1991)。すなわち、老年期の心の充足やアイデンティティのまとまりの感覚は、それまでの人生においてどれだけ満足できる日々を送ったかによるというわけである。

(2) 過去が変わる発達観

それならば、老年期以前に満足できない日々を

過ごした者には穏やかな老年期が訪れないのかという、けっしてそうではないようである。榎本(2004)は、過去が変わる発達観というものを提唱しているが、私たちは過去の自分史を客観的な次元において保持しているのではなく、主観的な解釈の次元において保持しているのである。つまり、過去の思い通りにいかなかった出来事、悔やんでも悔やみきれない失敗、さまざまな挫折体験といった生起時においては紛れもなく否定的な意味をもった出来事も、振り返るときの視点の如何によって肯定的な意味づけがなされることもあり得るのである。榎本(2005)は、自己物語化のメカニズムのひとつとして、否定的な出来事に関して、それがあったからこそ今の自分があるというように肯定的な意味づけをすることによって自分の過去を受容していくメカニズムをあげているが、そうしたことが老年期の振り返りにおいてしばしば起こると考えられる。

このように、私たちは事実の世界でなく意味の世界に生きているのであるから、振り返る視点が変われば過去に起こった個々の出来事のもつ意味も変わる、すなわち過去が変わるのである。

エリクソン他(1986=1990)は、このような老年期の振り返りの意義に関連した言及をしている。「昔抱いた希望や夢と実際に生きてきた人生とを比較するとき、思い通りにはいかない人生の背景という個別の状況の中で、その人個人が現実にも有する能力というものと折り合っていくと必死になる。老年者は、生涯にわたる連続性の感覚と非連続性あるいは拡散の感覚との間でバランスをとりつつ、人生の全体性における『わたし(I)』に、すなわち、われわれが実存的アイデンティティと呼ぶものに、最もよく反映するようなコミットメントを行い、それに従って行動するための最後の機会にも直面する」

(3) 統合対絶望

もともとエリクソン(1963=1977/1980)は、ライフサイクル論において、老年期の課題を統合対絶望としてとらえている。目の前の現実の諸条件と自分の体力や能力との間で折り合いをつける

とともに、過去の過ちや失敗あるいは好機を捕まえ損なったことなどの折り合いをつけることも老年期の大きな課題となる。うまく折り合いをつけることができれば統合へと踏み出すことができるであろうし、うまく折り合いをつけることができないときは絶望を垣間見ることもなりかねない。

ハーンたち(1998)は、エリクソンの理論や思索を参考に、アイデンティティの統合をとらえるための2つの次元を抽出している。2つの次元とは、展望と関係性である。展望とは超然とできる能力もしくは大きな見通しに奉仕するため個人的見解や自己の関心を抑制できる能力をさす。関係性とは、生き生きとした関わり合い、すなわち家族や友人、地域社会との深く意味ある関与をさす。これらをもとに以下の4つの統合性地位を設定している。

統合完了：統合がなされている人をさす。活動、価値、理想に豊富な知識をもってコミットし、自分の人生や現在・過去・未来に連続性の感覚をもっている。重要な他者との深いつながりももっている。

非探索：部分的に統合がなされている人をさす。限られた範囲の活動にコミットしているが、とくに展望をもっているわけではない。だいたいにおいて満足しているが、自己吟味を十分することはなく、生育過程で身についた価値観から抜け出すことなく暮らしている。

擬似統合：これも部分的に統合がなされている人をさす。ただし、他者へのコミットのみならず、活動や理想、価値観に対するコミットにも深みがみられない。その根底には、個人的信念や価値観に従って人生を生きてきたのではなく、単調・平凡に人生を生きてきたことへの不満がある。

絶望：現在実行可能な活動、理想、価値観にコミットしておらず、人生に対する満足感がほとんどない人をさす。自他の人生を肯定することがほとんどなく、苦々しい感じを醸し出したり、逃したチャンスを後悔したりしている。

このような基準に従って統合完了に分類された人たちは、有能で、率直で、感じがよく、好奇心が強く、世界と深く交わっていた。非探索とされ

た人たちは、一般に外向的で、内省に抵抗を示しがちで、新たな経験に開かれていないが満足はしており、その関心は主として家族をはじめとする身近な社会集団に集中していた。擬似統合とされた人たちは、苛立っていることが多く、対人関係の問題に気をとられ、社会関係において孤立気味であり、先の2群よりも人生に満足しておらず、神経症的で、社会的責任感が乏しかった。絶望とされた人たちは、閉鎖的で、抑うつ的で、人生にほとんど満足していなかった。

4. 福祉心理学的にみた 高齢者の心理への対応

(1) 身体的喪失と生活世界の縮小への対応

前述のように、高齢者は身体外見やさまざまな感覚機能・運動機能その他の身体機能の喪失を経験する。たとえば、感覚機能の低下により会話に支障をきたしたり、それがもとですれ違いが生じたりで、対人関係を煩わしく思い、人との関わりに消極的になるということも起こりがちである。あるいは、運動機能の低下や障害により歩行に支障をきたし、遠くへの外出や一人での外出が困難となり、活動範囲が大幅に縮小するといったことも起こりがちである。そうした生活世界の縮小に対して、物理的なサポートをするだけでなく、縮小してしまった、あるいは縮小しがちな関わりネットワークを維持・拡張していくための対応のあり方も模索する必要がある。

高齢になると、死が身近になることにより時間的展望が急速に縮小していく。そこでは死の受容ということが大きなテーマとなる。死の受容というときわめて露骨な表現になるが、やがて訪れる死を想定しつつ、自分自身のこれまでの人生を統合的にとらえて受容するということが目の前の課題として突きつけられているといつてよいであろう。そうした人生の受容を促す援助の方法として、榎本（2000, 2002）は自己物語面接法の適用を提唱し、高齢者福祉施設などにおいて実践を行っている。

(2) 仲間・配偶者の喪失と人間関係の縮小への対応

同年配の親しい友人たちや配偶者など身近な人たちとの死別は、高齢者にとって避けがたいものである。当然のことであるが、ソーシャル・サポートをもつことによって死別による抑うつ等の悪影響が緩和されるということに関しては、実証的なデータも報告されている（Norris and Murrell 1990; 岡林ほか 1997）。個人が利用し得るソーシャル・サポートは、日頃の対人関係のネットワークの広さや質にかかっている。

日本の高齢者、とくに男性にとって問題となるのは、仕事中心の生活を長年続けてきたことによる私生活領域の貧弱さと交友範囲の狭さである。そこで、高齢になる以前からの私生活領域の充実や交友関係の拡張が求められるが、高齢者に対する支援としては、喪失を埋める新たなネットワーク形成を促進するための場の提供も重要な意味をもつ。

(3) 社会的役割の喪失と自尊心の低下への対応

高齢者は、社会的地位や肩書を失い、社会貢献につながる社会的役割を失うことによって、自尊心の低下を経験する。また、さまざまな機能の低下により、どうしてもケアの対象としての立場に立たされがちである。人から世話を受けなければならぬ、つまり自立できない存在であると自分自身を認めざるを得ないとき、人は卑屈になったり、自尊心を低下させたりしがちである。

ここで考えなければならないのは、高齢者であっても、社会貢献につながる社会的役割を担う能力がある場合も少なくないということである。それまでの職業的役割は脱ぎ捨てなければならないとしても、新たな役割を身にまとうことはできるであろう。すでにシルバー人材としての登録等で新たな役割取得への支援は行われているが、まだまだ開拓し得る領域と考えられる。

こうした視点を補強する知見として、援助行為が援助した側の生活ストレスの克服に役立つということがある（Krause, et al. 1992; Midlarsky 1991; 高木 1998）。クラウスたち（1992）は、高齢者が援助を提供すれば、自己統制感が高まり、

抑うつ感が低下するとの報告をしている。高木(1998)は、援助者は有能で善良な存在として肯定的に評価されるのに対して、被援助者は問題を自力で解決できない無能で怠惰な存在として否定的に評価される傾向があるとしている。ミドラースキー(1991)は、高齢者が他者を援助することにより、つぎのような心理・社会的幸福感や安寧感を得ることが期待できるとしている。

①他者を助けることで、本来的に援助を受ける対象であるにもかかわらず、困っている人を積極的に助ける自分自身の姿を見て、低下している自尊心が回復する(自尊心回復)

②人の役に立ったことにより、有意義な人生を送っているという充実感を味わい、やる気生まれる(志気高揚)

③援助を通じて他者とのつながりを実感できる(社会的統合感)

実際、ボランティア活動に従事する中高年を対象にした調査により、ボランティア活動経験によって愛他的精神の高揚や人間関係の広がり、人生への意欲喚起などといった肯定的な成果が得られることを実証したとの報告もみられる(妹尾・高木2003)。

以上、高齢者の心理的特徴とそれをもたらす背景、高齢者の心理を踏まえて福祉心理学的に求められる対応について、いくつかの指摘をしてきた。高齢者の心理をめぐっては、この他にもさまざまな問題があり、高齢者に対する福祉心理学的な支援のあり方は、今後探究すべき重要な研究領域とあってよいであろう。

文献

榎本博明, 2000, 「語りのなかで変容していく<わたし>」『発達』82: 38-47.
 ———, 2002, 「物語ることで生成する自己物語——物語法の実践」『発達』91: 58-65.
 ———, 2004, 「ライフサイクルとパーソナリティの発達」榎本博明・桑原知子編著『人格心理学』放送大学教育振興会, 102-121.
 ———, 2005, 「自己物語化のメカニズム」日本教育心理学会第47回総会発表論文集 186.
 岡村秀樹・杉澤秀博・矢富直美・中谷陽明・高梨薫・深谷太郎・柴田博, 1997, 「配偶者との死別が高齢者の健康に及ぼす影響と社会的支援の緩衝効果」『心理

学研究』68: 147-154.
 下仲順子, 1980, 「老人における不安の特性」『老年心理学研究』6: 61-72.
 ———, 1995, 「高齢化社会における新しい老人像」南博文・やまだようこ編『講座・生涯発達心理学 第5巻 老いることの意味——中年期・老年期』, 81-116.
 ———, 1997, 「人格と加齢」下仲順子編『老年心理学』培風館, 62-76.
 妹尾香織・高木修, 2003, 「援助行動経験が援助者自身に与える効果——地域で活動するボランティアに見られる援助効果」『社会心理学研究』18: 106-118.
 高木修, 1998, 『人を助ける心——援助行動の社会心理学セクション社会心理学7』サイエンス社.
 対馬ゆき子, 1963, 「C.A.S.の日本標準化について」『教育心理学研究』11: 86-97.
 中里克治・下仲順子, 1989, 「青年前期から老年期にいたる不安の年齢変化」『教育心理学研究』37: 172-178.
 星薫, 2002, 「老年期の認知・記憶・知能」竹中星郎・星薫編著『老年期の心理と病気』放送大学教育振興会, 86-102.
 ———, 2002, 「老年心理学の課題」竹中星郎・星薫編著『老年期の心理と病気』放送大学教育振興会, 103-118.
 Angleitner, A., 1974, "Changes in Personality of Older People over 5-year Period of Observation" *Gerontologia*, 20: 179-185.
 Baltes, P. B. and Staudinger, U. M., 1993, "The Search for a Psychology of Wisdom," *Current Directions in Psychological Science*, 2: 75-80.
 Brandtstadter, J. and Greve, W., 1994, "The Aging Self: Stabilizing and Protective Processes," *Developmental Review*, 14: 52-80.
 Botwinick, I., 1973, *Ageing and Behavior*, New York: Springer.
 Costa, P. T. Jr., McCrae, R. R., Zonderman, A. B., Barbano, H. E., Lebowitz, B., and Larson, D. M., 1986, "Cross-Sectional Studies of Personality in the National Sample: Stability in Neuroticism, Extraversion, and Openness," *Psychology and Aging*, 1: 144-149.
 Erikson, E. H., 1963, *Childhood and Society*, New York: W.W. Norton & Company. (=1977/1980, 仁科弥生訳『幼児期と社会(1・2)』みすず書房.)
 Erikson, J. M., Erikson, E. H., and Kivnick, H., 1986, *Vital Involvement in Old age*, New York: W.W. Norton & Company. (=1990, 朝長正徳・朝長梨枝子訳『老年期——生き生きしたかかわりあい』みすず書房.)
 Field, D., and Millsap, R. E., 1991, "Personality in Advanced Old Age: Continuity or Change?" *Journal of Gerontology*, 46: 299-308.
 Fozard, J. L., 1972, "Predicting Age in the Adult Years

- from Psychological Assessments of Abilities and Personality," *Aging and Human Development*, 3: 175-182.
- Haan, N., 1985, "Common Personality Dimensions or Common Organization across the Life Span?" In J. M. Munnichs, et al. Eds., *Life-span and Change in Gerontological Perspective*, Orland: Academic Press.
- Havighurst, R. J., 1953 *Developmental Tasks and Education*, New York: Longman. (=1955, 荳司雅子監訳『人間の発達課題と教育』玉川大学出版部.)
- Hearn, S., Glenham, M., Strayer, J., Koopman, R., and Marcia, J. E., 1998, Integrity, Despair, and in between: Toward Construct Validation of Erikson's Eighth Stage. Manuscript submitted for publication. [Kroger, D. J. (2000) より]
- Horn, J. L., and Cattell, R. B., 1966, "Refinement and Test of the Theory of Fluid and Crystallized Intelligence." *Journal of Educational Psychology*, 57: 253-270.
- Krause, N., Herzog, A. R., and Baker, E., 1992, "Providing Support to Others and Well-being in Later Life." *Journal of Gerontology*, 47: 300-311.
- Kroger, D. J. 2000, *Identity Development: Adolescence through Adulthood*, Thousand Oaks, CA: Sage Pubns. (=2005, 榎本博明編訳『アイデンティティの発達——青年期から成人期』北大路書房.)
- Leon, G. R., Gillum, B., Gillum, R., and Gouze, M., 1979, "Personality Stability and Change over a 30-year Period: Middle Age to Old Age," *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47: 517-524.
- Lindenberger, U., and Baltes, P. B., 1997, "Intellectual Functioning in Old and Very Old Age: Cross-sectional Results from the Berlin Aging Study," *Psychology and Aging*, 12: 410-432.
- Livson, F. B., 1981, "Paths to Psychological Health in the Middle Years: Sex Differences," In D.N.Eichorn, et al. Eds., *Past and Present in the Middle Life*, New York: Academic Press.
- Midlarsky, E., 1991, "Helping as coping," In M.S.Clark Eds., *Prosocial behavior*, Newbury Park: Sage, 238-264.
- Neugarten, B. L., and Weinstein, K. K., 1964, "The Changing American Grandparent," *Journal of Marriage and the Family*, 26: 299-304.
- Norris, F. H., and Murrell, S. A., 1990, "Social Support, Life Events, and Stress as Modifiers of Adjustment to Bereavement by Older Adults," *Psychology and Aging*, 5: 429-436.
- Palmore, E., 1981, *Social Patterns in Normal Aging: Findings from the Duke Longitudinal Study*, Durham, N. C.: Duke University Press.
- Plassman, B. L., Welsh, K. A., Helms, B. S., Brandt, J., Page, W. F., and Breitner, J. C. S., 1995, "Intelligence and Education as Predictors of Cognitive State in Late Life: A Fifty-year Follow up," *Neurology*, 45: 1446-1450.
- Postema, L. J., and Schell, R. E., 1967, "Aging and Psychopathology: Some MMPI Evidence for Seemingly Greater Neurotic Behavior," *Journal of Clinical Psychology*, 23: 140-143.
- Reitzes, D. C., Mutran, E. J., and Fernandez, M. E., 1996, "Does Retirement Hurt Well-being? Factors Influencing Self-esteem and Depression among Retirees and Workers," *The Gerontologist*, 36: 649-656.
- Ryff, C. D., 1991, "Possible Selves in Adulthood and Old Age: A Tale of Shifting Horizons," *Psychology and Aging*, 6: 286-295.
- Schaie, K. W., 1980, "Intelligence and Problem Solving," In J.E.Birren, and R.B.Sloane Eds., *Handbook of Mental Health and Aging*, Englewood cliffs: Prentice-Hall, 262-284.
- Schaie, K. W., Labouvie, G. V., and Buech, B. U., 1973, "Generational and Cohort Specific Differences in Adult Cognitive Functioning," *Developmental Psychology*, 9: 151-166.
- Schaie, K. W., and Parham, I. D., 1976, "Stability of Adult Personality Traits: Fact or Fable?" *Journal of Personality and Social Psychology*, 34: 146-158.
- Thomae, H., 1980, "Personality and Adjustment to Aging," In J.E.Birren and R.B.Sloan Eds., *Handbook of Mental Health and Aging*, Englewood cliffs: Prentice-Hall, 285-309.

えのもと・ひろあき 名城大学人間学部教授。主な著書に『<私>の心理学的探求——物語としての自己の視点から』(有斐閣, 1999)。人格発達心理学専攻。
(enomotoh@ccmfs.meijo-u.ac.jp)